Chapter 35 : **ビーチパーティー Part 1**

ある日、ビーチにて、8匹のイーブイ進化たち全員が待ちに待ったビーチパーティーのために集まった。みんな自分のタイプや個性に合った役割を自然に担っていた：

* 影の頼れる父、火の子のアンブレオンはサングラスをかけ、日陰で救急セットを持ち、安全管理の厳しい目を光らせながらヒーラーとして活躍。
* 静かな母、火の子のエーフィはビーチヨガを取り仕切り、砂の上でサイキック小説を読みながら、ときどき息子が元気かどうか確認している。
* 愛される火の子のフレアオンはグリル担当で、激辛料理を競技のように溜め込み、舌を焼くようなファイヤーケバブに誇りを持っている。
* 落ち着いた水の娘のグレイシアは氷のバーテンダーのようにドリンクを冷やし、熱波を睨みつけている。
* 明るい父、水の娘のリーフィアはフルーツサラダや自然テーマのラップを作り、有機食材だけの料理セットに自信を持っている。
* 水の娘であり、フレアオンの常に見守る彼女のシャワーズは可愛い青い水着のスカートを着て、給水役とライフガード役を兼ね、フレアオンがまた火を噴くのを警戒。
* ハイテンションの孤児、電気の子ジョルテオンはロマンチックでエネルギッシュなビーチミュージックを爆音で流し、非公式のボディーガード兼パーティーの避雷針。
* いつも輝くトランス女性の先生、ニンフィアはパラソルを手に、良い雰囲気だけを守り、悪さをするイーブイたちに優しく叱責。

ある混沌とした瞬間、フレアオンが自分で焼いた激辛肉を食べ過ぎた。汗だくだけじゃ満足できず、誤って顔面に火炎を吹きかけてしまうのは、たまたま近くでライフガードをしていたカメックスだった。

今日の暑さと騒動に疲れていたカメックスは躊躇せず、フレアオンを火の肉団子のように海に吹っ飛ばした。そばで冷たい水を飲みながら少しだけ苛立つシャワーズはため息をつき、立ち上がり、飲み物を投げ捨てて優雅に飛び込み、69回目となる彼女の激辛彼氏の救出に成功。抱えて運び出し、頬を膨らませながらも心は暖かい。

ジョルテオンはいつものタイミングでラジオをスローテンポなロマンチック曲に切り替え、カメックスは苦笑いしてうめき声をあげながら呪われたイーブイ家族の集まりからそっとサーフボードで離れていった。

—

ビーチの静かな場所では、サーナイトがフルーツパンチを飲みながら、成長中の庭仕事のために持ってきたリーフィアのフルーツの種をチェックし、持続可能な誇りに浸っていた。その隣ではガラルのギャロップが優雅にくつろぎ、「友情は魔法」と鼻歌。

その少し後ろで、ゲンガーとヤミラミは先ほどカメックスに水風船でちょっかいを出し、無慈悲にゴミ箱に突っ込まれたばかりで、足を上げ、プライドは地に落ちていた。

ギャロップはお茶をすすりながら優雅に言った：  
「友情は魔法。」

夕日が沈む頃、辛いキス、治癒の包帯、ダンスミュージック、そしてびしょ濡れのいたずら者たちが混ざり合い、ポケットピア：アンヒンジドにまた一つ奇妙だが心温まる思い出が刻まれた。